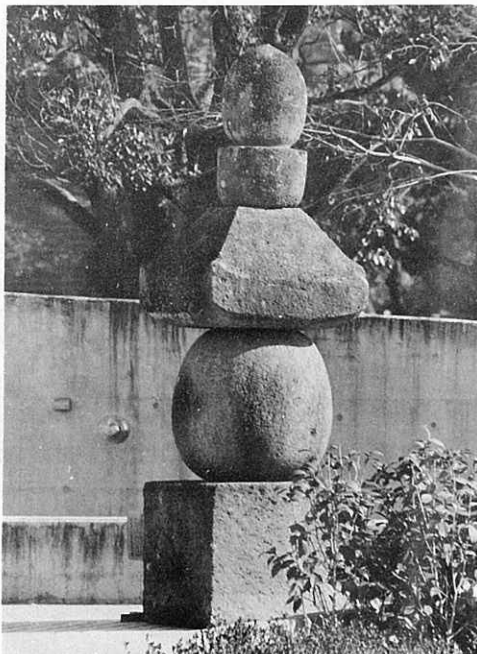


No. 5

博物館報



(石造五輪塔)

(写真説明)

地輪・水輪・火輪・風輪・空輪の五部から構成されている五輪塔は、石造塔婆の代表的なものの一つであって、平安時代後期に現われ、鎌倉時代にその盛期をむかえている。

この石造五輪塔は、大和町久池井の高城寺の所有であって、かつて「鎌倉さん」と呼ばれ、高城寺の開基である久池井の地頭国分次郎忠俊の供養塔であろうといわれている。全高2.95メートルの実に堂々たる石造物であって、造立銘はないが、その様式からみて県内には数少ない鎌倉時代の石造遺品であろうと推定されている。石材は安山岩であって、風輪と空輪は一石で構成され、舍利や経文等を納入する孔はうがたれていない。

鎌倉時代の石造物は、中央文化の影響を強く受けているのに対し、次の宝町時代に入ると、地方化しローカル色が濃厚に現われ、また、正面観を誇張するのと極めて対称的である。この五輪塔は、鎌倉時代における地方文化というものを石造物を通して知る資料として、また、石造文化史上一つの頂点をなす鎌倉時代の石塔婆の一つの遺品として注目されるものであろう。

目次

五輪塔	1
新確認佐賀県内植物について(その2)	2、3
白蛇山岩漆遺跡第一次発掘調査概報(その2)	4
日本古美術展から	5
天鏡殿の額 一鬼丸聖堂(その2)	6
ランプ 一青木繁作	7
博物館日誌、行事お知らせ	8

新確認佐賀県内植物について (その2)

裸子植物と単子葉類



ワスレグサ

裸子植物はいまから7千万年から2億3千万年もさかのぼる地質時代の中生代に栄えた植物で、現在はその種の数も減少して、世界中で約600種が現存している。いままで県内では13種が知られていたが、新たにハイビヤクシンが加えられた。ハイビヤクシンは確かな自生地はわからないという報告が多いが、玄界の島々では人のよりつかない断崖にあるものが多く、生えている環境から自生に相違ないものと考えられる。

またこの植物は、広く庭園に栽植されている植物で、福岡県、長崎県の島々や、遠くは岩手県の島や、伊豆半島で確認され、本県でもその自生分布が予想されていた。発見された端緒は、福田司氏（現在、東松浦郡七山中学校教諭、佐賀野鳥の会会員）が、馬渡島中学校に在任中、島の人々からハイビヤクシンが自生しているという話を聞き、倉成靖任氏（県事務課員、佐賀植物友の会幹事）と共に確認したものである。県内では植物の宝庫といわれる黒髪山に産するミヤマビヤクシンによく似ているが、海岸性で横に長くは性質があり、海岸の崖地では長い枝を下垂させている。

現在裸子植物はイチイ科1、マキ科1、イヌガヤ科1、マツ科6、スギ科1、ヒノキ科4、合計14が県内自生種の数であるが、今後、この裸子植物の新分布の存在は期待することはできないだろう。

単子葉類は県東部の湿地において新認められたものが多い。このことは三養基郡基山町に在住する倉成靖任氏および、植物友の会員のうち県東部に住者のグループが、数年間にわたる精力的な活動の賜である。

イネ科は18種を新たに加えたが、大部分は帰化植物である（植物誌以来累計153種）。カヤツリグサ科は27の新認植物を加え149である。この27種のうちスゲが14種もあり注目される。スゲは倉成氏の独りごちで、ときには深夜まで時間を忘れ、スゲの分類、観察、研究にとりくんだ成果である。このことを掲載する「佐賀の植物」は県内スゲ研究の先駆となることだろう。

ラン科は単子葉類では進化の進んだ植物で、熱帯地方に多く1万7千種もあるといわれる。本県には53種が知られていたが、新たに8種が加えられた。佐賀県の地形環境において8種もの新認は、金木の篤きで、植物友の会という組織の力と、新種をもとめて山野を

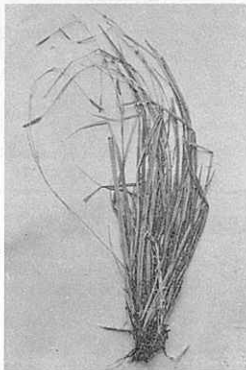


ミクリリカヤ

踏査した、同好者の観察眼のするどさによるものだろう。

ウキクサ科については、ミジコウキクサという顕花植物中、世界最小の植物が新認められたが、これは山下幸平先生（植物友の会顧問）および、江島電也氏（佐賀東高校教諭、植物友の会会員）の確かな観察眼に敬意を表したい。

単子葉類は昭和39年6月1日現在、県内分布数は485種であったが、64種が新認められ、昭和46年8月1日現在では549種となっている。今後は帰化種が多いイネ科やカヤツリグサ科を中心にさらに、新たな分布が知られることだろう。



ツシマスゲ

科名種名	産地
◎裸子植物	
●ヒノキ科	
78. ハイビヤクシン	馬渡島
◎被子植物▲単子葉類	
●ミクリ科	
79. ヒメミクリ	上峰村
●イバラモ科	
80. オオトリゲモ	鹿島市
●トチカガミ科	
81. オオカナダモ	鹿島市久保山
●イネ科	
82. オオカニツリ	黒髪山麓(帰化—欧州原産) (源神(帰化—欧州原産))
83. ヒゲナガスメノチャヒキ	嬉野町その他
84. タイヌビエ	" "
85. ヒメタイヌビエ	" "
86. ヒメイヌビエ	" "
87. エゾサヤヌカグサ	" "
88. ネズミムギ	各地(欧州原産—帰化)
89. コバンソウ	紅の松原(欧州原産)
90. オオクサキビ	伊万里市
91. スズメノコビエ	東春振村三津
92. オオアワガエリ	嘉瀬川堤防(北米原産—帰化)
93. ヒロハウシノゲグサ	小城町(欧州シベリヤ原産—帰化)
94. カナリークサヨシ	基山(欧州原産—帰化)
95. シラゲガヤ	浜玉町鳥巢(欧州原産—帰化)
96. コモチヒメアブラススキ	黒髪山(新品種)
97. メリケンカルガヤ	上峰村(帰化)
98. オオウシノゲグサ	基山町(帰化)
99. モロコシ	基山町、鳥栖市・中原町(逸出)
●カヤツリグサ科	
100. ショウジョウスゲ	天山
101. ケスゲ	"
102. シロガヤツリ	嬉野町
103. アンペライ	三田川町目達原、上峰村北部、唐津市大唐津市大良
104. エゾアブラガヤ	七山丹桑原、富士町杉
105. ミカワシンジュガヤ	三田川町目達原
106. マネキシシンジュガヤ	" "
107. ケシンジュガヤ	三田川町立野
108. イトイヌノハナヒゲ	東春振村大曲
109. ミクリガヤ	上峰村、鳥栖市五反三歩堤

110. コマツカサススキ	鳥栖市麓町、黒木町天川
111. シデアブラガヤ	黒木町天川、富士町杉山
112. タイワンヤマイ	北山ダム、浜町鳥巢
113. ヤマテリキスゲ	黒木町天川
114. アオバスゲ	九千部山
115. センダイスゲ	呼子町
116. シラカワスゲ	上峰村
117. ヒゲスゲ	馬渡島、小川島
118. ツシマスゲ	馬渡島
119. アズマナルコ	黒木町天川
120. チャイトスゲ	加唐島
121. キノクニスゲ	高島
122. ジングウスゲ	浮岳、加唐島
123. カタスゲ	高島、神集島
124. コウキヤガラ	黒髪山、加唐島
125. アイノコカンガレイ	相知
126. メアオスゲ	黒髪山
●ウキクサ科	
127. ミジンコウキクサ	牛津町
●ホシクサ科	
128. イトイヌノヒゲ	鳥栖市西部、上峰村、嬉野町水頭、東多久町仏坊
129. ニッポンイヌノヒゲ	東春振村三津
130. ゴマシオホシクサ	上峰村屋形原
131. サイコククロイヌノヒゲ	鎮西町、基山町
●ツユクサ科	
132. ノハカタカラクサ	基山町(南米原産—帰化)
●ユリ科	
133. ホソバシオデ	太良町中山
134. ワスレグサ	馬渡島、黒髪山
●アヤメ科	
135. カキツバタ	鳥栖市、日ノ隈山、多久市
●ラン科	
136. ナギラン	塩田町西山、唐泉山
137. クロムヨウラン	富士町杉山、唐泉山、塩田町
138. ハシナガヤマサギソウ	馬渡島
139. ウスギムヨウラン	高島
140. ササバラシ	嬉野町大野原
141. ヒメアタバラン	鹿島市丸木庭
142. シラン	太良町
143. ニラバラシ	馬渡島

白蛇山岩蔭遺跡第一次発掘調査

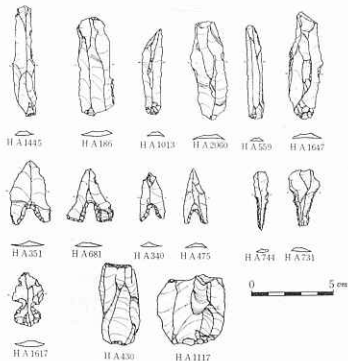
—伊万里市東山代町陽野所在 その2—

発掘調査は今夏7月25日より8月3日までの10日間実施した結果、層位論と原位置論を併用し、出土状況を綿密に記録するという方法を用いたことと、出土遺物が土器約1000点・石器約3000点と多量であったため、当初最下層まで完掘する予定が、縄文式時代の中期の

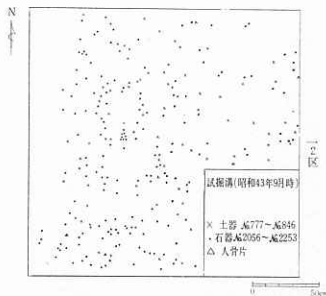
上面までの層で第一次発掘調査を終了した。

Aトレンチの層位は上部より、攪乱層・1層(晩期)・2層(後期)・3層(中期)という順で確認し、遺物の出土状況・出土遺物は下記のとおりであるが、土器は晩期の山ノ寺式系土器や、西北九州では出土例が少ない所清縄文や、地文に貝殻条痕文を使用し、細いへら状の施文具によって施文した沈線文の土器や、中期の阿高系の土器が出土している。さらにこれらの土器に伴ない、刃器・剥片鉄・打製石鉄・ドリル・石核等が出土した。

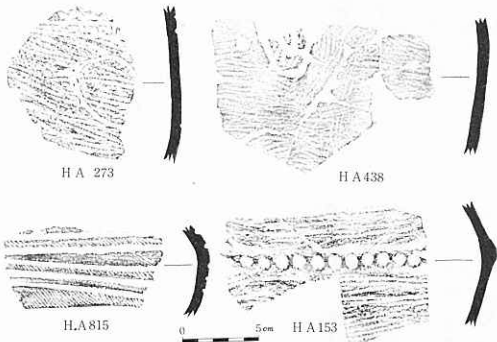
現在出土遺物の整理中であり、おいて報告書として発掘調査の結果を発表したい。



白蛇山岩蔭遺跡出土石器各種



遺物散布状況
白蛇山岩蔭遺跡Aトレンチ1区第3層 レベル=32.0m~47.0m



白蛇山岩蔭遺跡出土、土器各種 (学芸課 森野一朗)

日本古美術展から

東京国立博物館が全国を巡回して行っている「日本古美術展」は、9月11日から10月3日までの23日間、佐賀県立博物館で開催された。

この展覧会に出陳された資料は、東京国立博物館が保管している数多い古美術品のなかから各時代各分野にわたる代表的なものを選び系統的に陳列して、日本美術の流れを広く理解してもらうように企画されたものであった。

出陳された資料は、縄文時代の土器や土偶をはじめ、弥生時代の土器、青銅利器、そして、古墳時代の古墳に埋葬されていた副葬品。原始・古代における日本人の美意識の萌芽ともいへばおおらかにして素朴簡明な表現は、現代人の心をも強くとりえる造形的な美術品としての価値を秘めていると思われる。また、本県から出土した銅剣、銅矛、銅かぶたおよび垂飾付耳環あるいは史跡谷口古墳出土の碧玉製石剣や三角縁神獸鏡などの一括遺物など特別に出陳していただいたことも本展を盛り上げるうえに大きな役目を果たした



ではないかと考えられる。

奈良時代以後のものは、仏教美術がその主流を占めるなかで、法隆寺献納宝物のなかの金銅仏、百万塔、梵天立像、経筒、あるいは大唐西域記など東西文化交流のあとをしのばせるもの、あるいは平安時代の元暦校本万葉集、後撰集など日本化した文化などが多角的に展示された。

中世の時代になると、美術においても平安時代の貴族的な優美さにかわって動的で力強いものがあらわれてくる。展示された源頼朝像、三鱗紋兵庫鎖太刀などはその代表的なものである。また、浄土教が普及していくのであるが、虚空蔵菩薩像、阿彌陀米迦図などは、その時代相を反映するものとして、注目されるものである。禅僧は、宗元美術の影響を受けた水墨画をよくしたが、その代表的なものとして雪舟の四季山水図、明兆の白衣観音図、佐賀出身の等禪華花鳥図などの名作が公開された。



中世から近世へと移る過渡期ともいへば桃山時代には華やかで自由な美術が出現する。朱漆金鯉巻大小拵、金小札片肌殿二枚胴具足などは、この時代の美術の性格を見るにたるものであり、また、この時代に完成された茶の湯は、わか圓独等の工芸の発達をうながし、なかでも美濃焼をはじめとする陶磁器に多くの名品を生んだが、その茶道具の名品が公開されたことも意義深いものであった。

江戸時代になると、武家の格式にとらわれない町人の間に自由な美術が現われてきた。宗達・光琳の装飾画、広重の写生画、大雅・蕪村等の文人画、広重の浮世絵または、柿右衛門などの陶磁器や染色など、あらゆる部門の芸術の頂点に位置する作品が展示された意義は高く評価されるものであろう。

この日本美術の伝統は、明治維新以後における西欧美術の影響と相俟しながら近代美術へとひきつがれていくのである。

出陳資料総数 129件、このうち国宝3点、重要文化財22点、重要美術品2点を含む圧巻の催しとなったのである。入場者も学童から老齢の方まで、各階層にわたって1万数千人を数える盛況であった。これはこの展覧会が掲望にも似た情熱で待望されたものであることを示し、またこの展覧会が、地方文化の振興上意義深いものであったことも裏付けるものではないかと考えられるのである。

また、2回にわたって定例の美術映画会の会催も盛況であったし、放映を希望された北方小学校、佐賀女子高校には臨時で上映したことなど、この展覧会を親しみやすいものにしたのではないだろうか。

佐賀新聞社のご厚意で、本展の資料紹介を20数度にわたって掲載していただいたことも本展を盛りあげた事由の一つとして感謝し、本展の企画・運営にお骨折らいただいた東京国立博物館に感謝申しあげるものである。



資料紹介①

天 縦 殿 の 額

— 鬼丸聖堂 その2 —

雄渾な筆致で天縦殿と書かれた木額である。黒漆の面に金泥の字がさえてい。長く風雪に耐えてきたとは思えない程、新しい感じを受けるのは、これまでに何回となく塗りかえられ大切に保存されてきたためであろう。額の左下には朱色で「藤原 宗茂」と彫られた木印が貼られている。

この額は宗茂（佐賀藩5代藩主）の自筆によるもので鬼丸聖堂にか、げられてきたものとされる。鬼丸聖堂は元禄13年（1704）から弘化3年（1846）まで42年間、鬼丸の西御屋敷に設けられてきたもので綱茂公（佐賀藩三代藩主）自筆の六君子の画像、至聖堂の額及び長崎林道栄筆の由道門、聲振門の額がか、げられていた。綱茂公はかつて將軍綱吉の面前で経書を輪講せられた程の好学者であったため佐嘉城下での儒学は非常に盛んであったと思われる。

記録によると鬼丸聖堂で初めて釈業が行なわれたのは宝永5年（1705）8月4日で、この時は綱茂公は他界されており次の吉茂公の時である。釈業の式典のためにこれより1年前、実松元琳が命を受けて江戸の林家で講習を受けて帰藩し聖堂心遣、人才取立の役を命じられており第一回の釈業は全て彼の手で執行されている。それ以来毎年春秋の二回祭典が行なわれてきたといわれる。

鬼丸聖堂並びにそれに付属する講堂（学問所）についての規模や構造については現在その遺構や記録がないので判明し難いが、講堂の設立については、吉茂公御年譜（巻之二）に「元林 虎次小路 自分ノ講堂ヲ正徳2年聖堂御境内へ引移ス 後天縦殿ト号シ御入坐トナル」とありさらに綱茂公御年譜（巻之二下）には「天縦殿ハモト元林自分屋敷内ノ講堂ナリ 正徳2年聖堂御境内へ引移ス 享保10年宗茂公ヨリ天縦殿ト御筆ノ御額ヲ額サセラレ其後御入坐トナル」とあることから聖堂に講堂（学問所）が設けられたのは実松元琳の講堂（講習所）を正徳2年（1712年）にここに移されてからであり宗茂公自筆の天縦殿の額がこの講堂にか、げられたのは享保10年（1725）以降ということになる。ここに現存する「天縦殿」の額はそれを実証するが如く額裏には「享保十乙己年 孟夏二十七奠」と彫られている。（孟夏二十七奠は4月27日のこと）

なお「天縦」なる用語は論語巻之五 子罕第九に「太宰問於子貢曰 夫子聖者歟。何其多能也」子貢曰



木額、木縁 60×52.5

「固天縦之将聖。又多能也。」とあるがここからの出典ではなからうか。

鬼丸聖堂の最初の祭酒であり聖堂心遣人才取立の役であった実松元琳（1639—1726号は致齋）は神埼郡大童村（今の千代田町）生まれて幼時に抱疳で失明し山野検校の弟子となって音曲を学んでいたが本来学問好きの彼はたびたび武富康齋の家塾の門前で儒学の講義を漏れ聞きしていたのが見つかリ康齋から問われるま、にその志をのべたところ、聴講を許され目の治療費まで出してもらったといわれる。そして彼はち京都にて藤井懶齋、中村惕齋、米川操軒等の諸儒と交わり殊に伊東仁齋と親友があったといわれる。正徳2年自分の講習堂を鬼丸聖堂に移してからは毎月7日を定日として儒学の講義を行った。毎講の列席者は80余人に及んだといわれ、これが佐賀藩学制の嚆矢であるといわれている。実松家は代々聖堂役を勤めてきたので佐賀藩学の大御所でもあった。

佐賀藩内での聖堂はこの外、元禄7年武富威成による大財聖堂、宝永5年多久茂文による多久聖廟が建てられ、それともなう学問の場として各々の依仁亭、東原庫舎があり、これらはいづれも江戸時代における精神文化や教育史をひもどくうえで貴重なものである。なお天縦殿の額はこれまで鍋島報效会に所蔵されていたもので佐賀市の重要文化財の指定を受けている。

（学芸課 尾形彰郎）

資料紹介②

ランプ

— 青木 繁作 —

和紙の柔らかなさを感じさせる数冊の本の上に、ランプがきちんと据えられている。

繊細にはりめくられた画家の眼は、対象のすべてを見ついているかのようだ。

しかし、この画家の鋭い観察眼に気づく前に、われわれはまず、この絵のもつある雰囲気、心にひかれるだろう。

たとえば、このランプのわれわれに与える印象は、まるで異国風のしゃれた場合でもあるかのようだ。おそらく日常生活に使われたのであろうが、このランプは生活の油臭さを全然感じさせない。また、敷かれた本も、人の手垢にまみれたという風とはだいぶ異なるよう。

さらに、バックのにじんだ色の動きは、単なる背景描写をこえて、ある幻想的な心の動きを見るもの側に予感させる。

明らかに、この水彩画は、明治初期の固い写実描写とは全然別箇のものであるし、また黒田清輝らの柔かい外光描写の平坦さとも異なっている。

つまり、ここに写生されたランプは、青木が学んだ不同舎風の日常描写のひとつの作例でありながら、すでに在るものを写すという以上に、画家の内にごめく心の動きを伝えるということに、よりおおくの意味を持たされているといえよう。

そして、その画家の心の動きとは、まさに明治中期以降にわが国芸文界に湧き起った浪漫的風潮のそれと他ならなかった。

この作品の描かれたとされる明治34年は、鳳晶子の「みだれ髪」ので大年でもあり、それより4年前には藤村の「若葉集」がでて青木ら青年の心をたぎらせていたのである。

このように、おもに詩歌の領域でみられた、感情・空想・主観・個性・形式の自由などを重んじる浪漫主義の昂まりのなかで、それに共鳴した青木は、自らの天分を洋画に見出したのである。

ところで、青木の生涯は、ある意味では彼の作品以上にドラマチックであり、いわば、その短い生涯が浪漫主義そのものでもあった。

彼は、明治15年7月13日、旧有馬藩士青木廉吾の長男として久留米に生れた。

すでに中学で文芸雑誌を出したり、水彩画を描いたりして芸術的雰囲気浸っていた彼が、郷土にいた洋

画家森 三美の熱に通い、高等小学校時代の同級生坂本 繁二郎とと洋画の手ほどきを受け始めたのは、明治29年14歳の時であった。

明治32年には、父の激しい反対を押しきって中学を中退し、洋画家を志して上京、まず小山正太郎の不同舎に入門した。「物の社会は物これを造れり、唯假象の社会のみ人これを創作し、人類のみこれを楽しむ」というハルトマンの言葉が、当時の溢れるような彼の芸術意欲をささえていた。

翌33年には、東京美術学校西洋画科選科に入学し、本格的な洋画の指導を受ける師ら、上野の図書館に通って自らの読書欲をみだしている。

このようななかで、青木の独自性は次第に周囲の注目をひいていき、明治36年9月、美校4年在学中に白馬会第8回展に出品した神話原稿が第1回白馬賞を受賞した。ついで翌年の第9回展には、近代日本美術史上の記念碑的な大作「海の幸」を出品し、青木の名声はいよいよ高まった。

しかし、その後は数々の不遇のため、明治44年、わずか29歳の若さで没するまで、彼の生涯は、その作品をも含めて転落への傾斜を深めていくのである。

挿絵の「ランプ」は、彼が「海の幸」へと登りつめる過程の最も初期の作例のひとつであるが、文学的素養に培われた浪漫的心情と、たんなる写生をこえた対象のみずみずしい生命感を画面にもりこんでいく後年の青木独特の天性を、すでにこの絵の中にもうかがうことができる。



1901年頃 31×22.5cm 水彩 (学芸課 三輪英夫)

博物館日誌

10月3日	「日本古美術展」映写会	5日まで)	11月2日	明治大学 杉原教授来館
10月3日	「日本古美術展」終了		11月5日	長崎県立美術博物館長外3名来館
10月7日	「画聖鉄斎名作展」開場		11月6日	第2回博物館協議会(47年度事業計画を審議)
10月8日	鉄斎研究所 理事 富岡益太郎氏来館		11月7日	県展終了
10月9日	鉄斎展講演会「祖父鉄斎を語る」 講師富岡益太郎氏		11月9日	第3回移動博物館開場(伊万里市にて11月14日まで)
10月9日	第1回移動博物館開場(西有田町にて10月13日まで)		11月10日	県高等学校美術展(大展示室にて11月14日まで)
10月13日	人事院総裁 佐藤達夫氏来館		11月13日	文化庁文化普及課長補佐蛭田氏来館
10月20日	愛知県議会文教委員14名来館		11月15日	「明治・大正・昭和名作美術展」開場
10月21日	東京佐賀県人会 40名来館		11月17日	文化庁文化普及課長土生氏来館
10月21日	無形文化財 長野埜志氏来館		11月20日	名作美術展講演会「近代美術における写実の展開」講師佐賀大学教授石本秀雄氏
10月22日	徳川黎明会徳川義宣氏来館		11月20日	九州学生書道展開場(大展示室にて11月25日まで)
10月22日	画聖鉄斎名作展終了		11月28日	「明治・大正・昭和名作美術展」終了
10月30日	第21回県展開場			
11月1日	第2回移動博物館開場(呼子町にて11月			

行事お知らせ

事業名	月日	曜	時間	摘要
常設展 「佐賀県の歴史と文化展」	12・4	土	9.00 ▼ 16.30	佐賀県の自然科学、考古、歴史、美術工芸 月曜休館 観覧料 一般 大高生 中小生(円) 個人 50 30 20 団体 30 20 10
	12・26	日		
	1・5	水		
	1・16	日		
研究講座	1・22	土	13.30 から	「近代絵画の展開における本県の絵画」(聴講無料) 講師 佐賀大学教授 岸田勉氏
日本美術院展	1・21 ▼ 1・30	金 ▼ 日	9.00 ▼ 16.30	無休 観覧料 大人 大高生 中小生(円) 個人 150 100 50

常設展紹介

1、自然科学関係

本県の自然史を理解するための資料として、主な岩石、化石類をはじめ、天然記念物、動植物の標本、有明海の干潟模型や佐賀県地形模型、恐竜の生態模型などを展示する。

2、考古関係

先史、原史、古代における県内出土の代表的な遺物(石器、土器、銅器、鉄器、木製品、装身具類)を、パネルや模型、地図なども併用して系統的に展示する。

3、歴史関係

本県に伝世した奈良、平安、鎌倉時代の仏像、仏画をはじめ名護屋城跡関係資料や金工資料(刀剣、鐙、鎧、銃砲)のほか、幕末における近代科学技術に関する

資料を展示する。

4、美術工芸関係

近世、近代における本県に關係深い絵画、書跡、陶磁器などの美術工芸品を展示する。

博物館報 第5号

発行年月日 昭和46年12月1日

編集 古賀秀男

発行 佐賀市城内一丁目15-23
佐賀県立博物館

印刷 佐賀印刷社